

東京都考案「ヘルプマーク」、配布広がる

外見でわからぬ上肢まひなど

外見からは気づきにくい病気や障害を知らせる「ヘルプマーク」が全国に広がり始めた。電車やバス、街中で周囲の配慮を促すために東京都が考案、採用する自治体が相次いでいる。関係者はマークを一層普及させ、認知度を上げることを目指す。

東京都墨田区の三宅裕さん（63）は、5歳のときに感染したポリオの後遺症で左腕を頭上に挙げることができない。3級の身体障害者手帳を交付されているが、長袖を着ると見た目だけでは障害があることは分らない。

「これを持ち上げていただけませんか」。電車内で、重い荷物を網棚にあげようとしたとき、近くにいた男性に頼むと、カバンのヘルプマークに気づき、快く手を貸してくれたという。

上肢のまひや聴覚の障害、心疾患などの病気は外見からは分からないことが多く、ズボンに隠れた義足も周囲は気づきにくい。こうした障害がある人の「本当は席を譲ってもらいたいけど、自分からは言い出しにくい」という悩みに応えようと、都が独自に作成したのがヘルプマークだ。

赤地に白抜き十字とハートマークをあしらった。ハートには「助ける気持ちを持って」という意味を込めている。2012年から都営地下鉄や都営バスなどで、カバンに付けられるタグの配布を始め、今年7月末までに約13万個を配布した。

「マークを付けていると、障害のことをいちいち説明しなくてもいい。助けを求めやすくてありがたい」（三宅さん）

都は全国の自治体にヘルプマークの採用を働きかけ、今年度から京都、和歌山、徳島、青森、奈良の5府県が県庁や福祉事務所などでタグの配布を始めた。岐阜、神奈川の両県、札幌市も導入を検討して



ヘルプマーク

いるという。

ヘルプマークの付属シールには連絡先や服用中の薬の種類などが書き込めるようになっており、災害時や急に倒れたときなどに周りにいる人が対応しやすくなる。

大田区の男性（74）は、緑内障を患って視力が低下しマークを身につけている。じんましんで救急搬送されたとき、タグの裏側に緑内障治療薬の種類を書いたシールを貼っていた。搬送先の医師から「使ってはいけない薬をすぐに把握でき、助かった」と言われ、迅速な処置につながったという。

課題は認知度の向上。マークの意味を知らない人はまだ多く、外見上は気づきにくい障害のある人からは「電車で席を譲ってもらえることは少ない」との声が上がる。都は今年1月、国に対してマークの全国普及に協力するよう求めたが、今のところ具体的な動きはないという。

都の担当者は「全国的に広がれば、見えない障害への理解も深まる。20年の東京五輪・パラリンピックも見据えて認知度を上げていきたい」と話している。

（日本経済新聞・東京（夕刊） 2016年11月21日）